
ブラック・ラブ

君嶋密

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブラック・ラブ

【Nコード】

N5890C

【作者名】

君嶋密

【あらすじ】

僕は一体何処へ向かって走っているんだろう！？真つ暗闇を疾走する激しすぎる愛情と情熱は、普通に生きる人たちには解らないだろう・・・盲人の愛のかたちを生々しく描いた青春恋愛小説！

第一話 雨の日

第一章 1

地下鉄半蔵門線を渋谷で降りて道玄坂方面の出口に向かうと、フアーストフードの安っぽい油の匂いに混じって濡れたアスファルトの匂いがし、雨が降り始めたのだと気づいた。

雨は苦手だ。

傘をさすぐらいなら濡れたほうがいい。僕は滅多に傘をささない。酷いどしゃ降りの時には窓辺でその降り様をずっと眺めている。そして何千、何万、という雨粒の一粒一粒がはつきりとこの目で見ることが出来たらどんなにいいだろうとじっと目を凝らして見つめてみるんだ。こうして雨の日にはいつも眺めていれば、ある日突然に見えるようになるかもしれない。軽いノリで留学した女子大生が、英語は大の苦手で大した勉強もしてないのに、ある日アメリカ人の友達が下品でどうしようもないやらしい話を喋っているのを突然理解できるようになる。よくあることだ。だから僕は雨粒を眺めるのはやめない。僕にもある日突然やってくるはずだ。大きな雨粒が滑らかな表面に様々な景色を映しながらもの凄いスピードで落ち、僕はその表面に自分の瞳をしっかりと確認できる。たとえば今は白く光るカーテンにしか見えなくても。

そんなことはどうでもいいんだっとな。

映画館の入ったビルの地下から階段を上って外に出る。雨は降り始めたばかりのようで、歩道の植え込みの御影石に腰掛け、若い女の子達が雨も気にせず楽しそうに喋っていた。歩道の濡れて光るタイルを見つめながら坂道を上っていく。僕は決して焦らない。一步一步確かめるように上っていく。曲がる所だって目をつぶっていても判る。何度もここには来ているし、僕にとって特別な場所だからだ。

猥雑な歓楽街とホテル街の入り口を右に入りもう少し坂道を上っ

てもう一度右に曲がる。この辺りはいつも静かだ。そしてこれから起こるであろうことを期待させてくれる妖しさがある。僕は何時間かのち、全てを満たされた満足感と常人の想像を絶する疲労感、そして何時までこんなことを続けていけるのだろうかという不安とどうしようもない寂しさを抱えて同じ道を辿って帰るのだ。

しばらくするとあのマンションが見えてくる。入り口は狭く、大きなアメリカ製のステーションワゴンが何時も横付けされていて入りづらい。エレベーターホールは薄暗く、すえた匂いがどこからきているのかわからない。ひと気も全くない。雨樋から雨水用のパイプに集まった水が流れ落ち排水溝へと落ちていく音しか聴こえない。さあ、そろそろ始めようか。

僕はある部屋のインターフォンを押した。

第二話 彼女

「開いているからそのまま入って」

ドアを開けるとエアコンの乾いた冷気が鬱陶しく雨に湿った肌を乾かそうとした。僕はスーツのジャケットを脱いでリビングのソファにそっと掛けた。ネクタイは元々していない。

キッチンから飲み物を持って彼女がやってきた。足音はあくまで優しく、ゆっくりと静かだ。彼女はテーブルに飲み物をそっと置いて、「雨が降ってるのね。ここのところずっと振ったり止んだりだからずっと外には出ていないの。貴方なら分かるでしょう？」といった。

僕は彼女と接する時、緊張感を持たずには居られない。僕にとって彼女は絶対であり、無くてはならないものだからだ。僕は、彼女に依存して生きている。彼女がもし居なくなってしまったら……。そんなことを考えただけでも果てしない闇が急速に広がり、何処かに吸い込まれてしまうような感覚に襲われる。

「何を黙ってるの？」彼女の声は繊細だが力強く優しい。僕はこの声が好きだ。いや、声だけじゃない。彼女が好んで付けているクリニークのフレグランス、近づくほどにその香りは彼女の存在を現実的な幸福感で包んでくれる。真っ直ぐで長い髪はいつもサラッとしていて、指先が触れるだけで僕は彼女を強く引き寄せずには居られない。そう、僕は彼女の何もかもが好きなのだ。「ごめん。ここへ来るといつも緊張しちゃうんだ。何時まで経っても慣れない。アルコールを入れてから来ようかといつも思うんだけど、この後まだ予定があるしね。きつとなにしても駄目だと思うよ」そう云って彼女が用意してくれたアイスコーヒーをブラックのまま含んだ。少しだけ緊張感が解けた気がする。

「いいのよ、どうしていつも緊張しちゃうのかしら？私、もしかして変なオーラだしてるのかもね。でも本当にいいのよ。私達、特

別なお付き合いただけれど…貴方も一応お客様だから。私も十分すぎるほどのお金を頂いてるし、本当にリラックスしていいのよ。時間が勿体無いからそろそろ始めましょう。」と云って優しく僕の手を握った。

僕と彼女の関係はとても複雑で、説明するには何人もの登場人物とその生い立ち、人間関係のあやみtainなものを含めなければ説明がつかないし説明しても余り理解できないだろう。しかし彼女がどういう女性でどうして僕が彼女に強く惹かれるようになったかを説明することはそれほど難しくない。

「さあ、部屋に行きましょう。」彼女の声が耳元で囁く。優しさの中に俄な強制の匂いを含んでいる。壁をそつとなぞりながら廊下を進み、奥の部屋の扉を開けて僕は先に入る。後から入った彼女がドアを静かに閉めたとき、そこから全てが新しく始まるのだ。

僕はべつに性的倒錯者じゃない。彼女もそうだ。しかし僕達は…この極めて偏った環境と性的嗜好のかたちでしか愛し合えない。僕の心から愛する人は盲目で…サディスティックな性的サービスを仕事にしているSM嬢なのだ。そして僕は…金銭の授受によってのみ彼女に触れることを許される、彼女でなければ全てを開放できない…盲人なのだ。

第三話 過去

2

「分かりました。じゃあ何時もの様に3時に伺います。はい、そうですね、宜しく願います。」受話器を静かに置いてマールボロに火をつけた。瞼を閉じてこの後の展開を想像してみる。まあ、なるようにしかならないか。どうってことないさ。

僕はこの青山のマンションでデザイン事務所を営んでいる。スタッフは僕とアルバイトの女の子が一人だけ。そしてここに僕は住んでいる。目を悪くする前、今から5年程前、僕は勤めていた銀座にある広告代理店を辞め、自分のマンションで個人営業をするようになった。何とか喰っていけるだけの収入はかるうじてある。会社を辞めた理由は幾つかあるが、目の病気が徐々に悪化し隠し切れなくなったことと、その事を知って喜ぶような連中が沢山居るような会社に残る理由が無かったからだ。それに僕は酷く疲れていた。外資系の大きなスーパーストアの広告戦略を任せ、毎日文化も価値観も違うアイルランド人やフランス人と意見のすり合わせをし、日本人の価値観を切々と説いた。彼らは優秀なビジネスマンだったが、根本にある人種的偏見を捨てようとは決してしなかった。ある程度の戦略は成功し、彼らの会社は日本上陸の第一歩を無事踏み出すことが出来た。千葉県湾岸開発地区にある巨大なショッピングセンターは、まるでガリバーの為に作ったかのような要塞じみた建物で、下町の商店街育ちの僕からしたら全く現実感の無い遊園地にしか見えなかった。ともあれ、一段落ついたので僕はこの仕事から降りたいと直属の上司に告白した。妻との離婚問題も難航していて、とにかくまとまった休みが欲しかったのだ。彼は当然のこの様に僕を説得しようとした。会社の売り上げを大きく左右するプロジェクトを今更他人には任せられないと。僕は代わりにやりたがる人間は社内にも幾らでも居る、暫く休みが欲しいのだ、と正直に云って、とり

あえず1ヶ月の休暇を貰った。

僕は久し振りに人間らしい生活を取り戻した。朝はハムエッグを作ってトーストを焼き、身支度を整えて散歩に出る。青山通りから表参道を下り、歩道橋のところから右手に入って千駄ヶ谷小学校の方へ抜ける。そして神宮の森から青山ツインタワーの交差点までゆっくり歩き、青山通りを渋谷方面に戻ってくる道順だ。都心にしては緑の多いこの辺りは、もの想いに耽るには最適である。僕はこれからのことを思った。

僕の抱えている眼病は網膜の病気で、治療法の無い眼病だ。発病したときは日常生活に支障は無かったが、徐々に悪化するにつれ、車やオートバイの運転が出来なくなり、真っ直ぐ泳げなくなり、A4サイズの書類に目を通すことが出来なくなつた。10年という長い時間を掛けて。今は杖なしでは何処へも行けない。

女房とは暫く会っていなかった。彼女は将来を悲観していた。口では何時までも一緒に居て貴方を支える、と言ってくれたが、心の奥底では、よりによつて私の夫がどうしてこんな病気に、どうして私がこんなめに、と内心想っていたのだろう。ある日突然「貴方を愛し続けるのはとても辛いことだ」と書き残して出ていってしまった。僕は僕で、仕事中心の毎日から抜け出せず、好きにさせてしまった。彼女は僕より4つ下で、立派な両親に育てられた末っ子だから、ずっと僕に甘えたかったのかもしれない。僕は今後のことを考え、彼女とは離婚したほうがいいと思った。僕がいずれ失明した時、彼女は受け入れる努力とストレスを強いられる。彼女はまだ若いし綺麗な女性だから幾らでもやり直しがきくだろう、と。

話は簡単には進まなかった。彼女の両親が僕の病気について、結婚前から分かっていたのではないか、大事な娘を傷つけた責任を取れと、弁護士をたてていいだした。その後彼女の新しい恋人が詳しく知らないが、赤坂あたりの暴力団関係者を知り合いに持つ、との事だった。僕に金を寄越せとしつこく迫った。もちろん相手になどしなかった。そんなこんなで離婚の話は複雑になり、弁護士もあ

れこれ言ってこなくなった。

僕は会社を辞めることにした。鬱陶しいのはもうごめんだ。多少の蓄えもあるし、じっくり今後の人生を考えようと思った。しかしそうは。いかなかった。会社を辞めた直後から、僕の携帯は 仕事関係と思われる電話には決して出なかった 仕事の依頼メッセージで一杯になり、その中には昔世話になって断ることの出来ないものもあった。そうして…今までできてしまった。

当時に比べて全く見えなくなってしまったが、書類は全てスキヤナで読み取って拡大して読む。どうしても出来ないことはアルバイトの女の子にやってもらう。何とかなるものだ。

「社長、田中さんからお電話です」彼女は早稲田の学生で、とても綺麗な喋り方をするのに感心して、働いて貰うことにした。友人からの紹介だ。

「わかつているよ、同じ部屋に居るんだからさ」彼女がそつと受話器を渡してくれた。

受話器をあてると聞き覚えのある声だった。

「アキラ？私よ。久し振りね。」

彼女は香織、離婚した妻だった。

第四話 秋風

3

「すぐくくし振りだね。一体どうしたの？何か問題でもあったのかな。僕は相変わらずなんだけど…君はどう？具合悪くなったりしてないかい？」当たり前障り無くいったが余りに突然なのでいささか自分らしくない受け答えをしてしまった。

「相変わらず優しい言葉掛けてくれるのね。一緒に暮らしてる時はほったらかしにされて、凄く寂しかったわ。」

「そうだったな、ごめんよ。あのさ、これから大事な打ち合わせに出掛けなきゃいけないんだ。君も知ってる通り僕は移動に時間がかかる。3時に池袋のメトロポリタンなんだ。どんな用件なのかな？」

「くし振りに会って話したいの。打ち合わせの後でいいわ。時間作ってもらえるかしら？」

「分かった。僕はその後銀座の伊東屋で注文していた材料のサンプルを取りに行く。だから銀座のプリンチペで7時、でどうだろう？」

「いいわ。よく待ち合わせしたものね、懐かしいわ…じゃあ7時に、ね」

やれやれ、と僕は思った。詳しく話さないところをみると決していい話ではないだろう。そろそろ出ないとな。

「僕はそろそろ出るから君はあがっていいよ。電話は留守電にすればいいんだ。タイムカードは手書きで5時にしておけばいい。そこに僕の認印があるだろう？それを押しておけば済む。」

「でも社長、お昼過ぎたばかりですよ。いくらなんでも申し訳ないです。私今日全然働いてないですよ、困ります」

「いいんだどうせヒマなんだし。それに長い時間君を事務所に独りで居させたくないんだよ。最近は変な奴が多いからさ。」僕が

そう云うと彼女は、ふう、と大きく溜息をついてくすつと笑った。

「分かりました。そのかわり池袋のメトロポリタンまで一緒にさせてください。私の地元ですから社長一人で行って苦勞することありません。いいですね？」

「そうか、じゃあ甘えさせてもらおうかな。原宿まで歩いて山手線で行こう」

僕のマンションは紀伊国屋の裏手にある。一度青山通りに出て表参道をゆつくり下った。彼女、長崎さんが腕を軽く組んでくれたので杖は必要なかった。昼過ぎから晴れ間が出てきて日差しが強くなつたが、湿度が低くさらつとしていて、秋の気配を感じた。カフェのテラス席も沢山の人で賑わっている様だ。

「長崎さんは2年生だったね。まだ早いけど就職はどうするつもりなの？」と僕が訊くと、丁度反対側から来たカッパルにぶつからないようにと、軽く組んである腕を押して、上手にかわしてくれた。

「そうですね。高校生の頃はずっと留学願望があつて……すっかり語学力をつけたかつたんですが、社長のところで働かせてもらうようになって、広告もいいなつて思つてるんです。」

「うーん、たいした仕事をさせてあげられてないし、広告の仕事と呼んで果たしていいものか、つて仕事が多いからね。君にいい経験を積ませることが出来ない。本気で考えてるんだつたら大きい会社でいい仕事に携わる事だ。良かったら僕が紹介してあげてもいい」

「そんな、駄目です、社長のところで一緒に働くのが好きなんです。」そう言つてもう一度組んだ腕をぐつと押した。さっきより強めで長崎さんの胸が二の腕に触れた。思いがけないほど柔らかくふくよかだったので一瞬どきつとした。慌てて

「おいおい、僕のところは早稲田の優秀な学生を新卒で採るような甲斐性は無いぜ。冗談いつて笑わせようとしてるな」丁度坂道の中ほどで、ヒルズ側には人が多そうだったが、こちらはそれほどもない。

「社長、さっきのお電話の女性、奥さんですか？」

「そうだよ。もう離婚して4年になる。会うのは友達の結婚式以来だから2年振りぐらいかな。正直会うのは気が重い。昔のことを思い出したくないしね」

「そうですか。でも社長と別れるなんて信じられない」珍しく若者っぽくいったので思わず笑ってしまった。長崎さんはぎゅっと力を強めて僕の腕を締め付けた。その時秋の乾いた風と一緒に彼女の若々しい匂いが鼻をかすめ、一瞬だけ親密な空気が僕たちの周りを包んだ。

最近の音楽のことや読んだ本、お酒やカラオケの話、原宿から池袋に着くまで色んな話をした。池袋にあっという間に着いてしまったので、ラウンジで一服することにした。そして長崎さんがどうしても打ち合わせに参加させてもらいたいというので、アシスタントとして一緒に居てもらうことにした。彼女は何時も品のいい服装をしているので全く問題なかった。

打ち合わせは順調に終わった。珍しく僕が綺麗な女の子を連れていたのでその話で持ちきりだった。長崎さんは初対面、初体験にもかかわらず相手に対して一切物怖じせず、僕のサポートをちよつとした打ち合わせのみで理解してすっかり勤め上げた。長崎さんは周りの人間を自分の存在感と理知的な会話力で魅了し、納得させてしまいう力を持った女性だった。

帰りのエントランスで取引先を見送った後、彼女がいった。

「やっぱり私：社長と一緒に働きたい。ハンディを克服し、自分の能力で戦っている社長を尊敬しています。私がお手伝いさせて頂く事で社長の仕事の幅と質を高めることが出来るなら……ずっと一緒に居させてください」

僕はちよつと失敗したな、と思った。彼女はまだ若く純粹で、それだけに思い込みがちだ。この仕事は奇麗事だけで進むようなものじゃないし、ましてや僕の元で働かせるなんて親御さんに申し訳が立たない。アルバイトが目一杯のラインだ。

「ありがとう。次の約束があるからもう行くよ。今日は本当に助かった、君はとても優秀だった。僕のほうこそ君を尊敬してるよ」

「奥さんのところへ行くんですか？」

「そうだ。食事だけして、早めに帰ろうと思っている」一緒に駅に向かつて歩いた。長崎さんは改札まで付き合ってくれた。池袋駅は仕事終わりのラッシュアワーで人がごった返していた。伸縮式の白杖をブリーフケースから出して、長崎さんにもう一度礼を言った。彼女は何故か僕のスーツのジャケットの端を持ったままずっと黙ったままで、何か言いたげだった。どうしたのか訊こうとしたとき、

「私厭です。奥さんと会って欲しくない。社長のことが、貴方のことがずっと好きです。」と、びっくりするくらいはつきりと言った。僕はその彼女の、長崎さんの顔を見つめてもはつきり確認することができない。どんなに澄んだ眼差しであろうと。紅潮した頬や耳朶を。そしてこの純粋な恋心を受け入れることが出来ない。

第五話 有楽町で逢いましょう

銀座の伊東屋から出た頃には薄暗くなっていた。会社帰りのサラリーマンやOL、誰もが週末の夜を前向きに楽しく過ごそうという意気込みと期待を抱いているようだった。僕はプリンチペに向かうとして一番近い横断歩道の歩行者用信号を探した。杖を持っていることと、薄暗い夕暮れにサングラスで困っている視覚障害者に見えたのだろう、初老の男性が「どちらまで行かれるのですか」と声を掛けてくれた。僕は待ち合わせの為プリンチペまで行くのだ、と説明した。

「そうですか、幸い方向が同じだ。一緒に行きましょう」そういうと僕の背中を手のひらでそつと添えた。

「貴方失礼だが：どんなお仕事を？」

「デザイン事務所を個人で。気楽なものです」

「なるほどおりで、君はスーツの趣味がとて面白い。言い方が悪くなってしまうが：とても視力のハンディを抱えてるようには見えなくてね、そのギャップに思わず声を掛けてしまった。そのスーツはアルマーニだろう。シャツはバーニーズだね。洗練されていて理知的だ、そしてそのゴーグルタイプのスポーツグラスが君を戦略的な男に仕立てている」

「お詳しいんですね、僕は着道楽なんです。みすばらしい恰好だけはどうしてもできない。でもこの眼鏡はあくまで病氣用、というか、光が苦手なので僕には必需品です。それに色々なところにつかるから、スポーツタイプはタフで使い勝手がいい」

「なるほど。いろいろあるわけですね。さあ着きました。お別れのです。何方と待ち合わせを？」

「別れた家内です。久し振りに会うのでちよつと気が重い」僕がそういつて笑うと、彼はふむ、といった感じで、

「そうですか。事情はどうあれ優しくしてあげることだ。有楽町

は恋の町、だからね。それじゃあ、グッド・ラック」そういつて駅のほうへ行ってしまった。

30分待つても香織は来なかった。僕は携帯の番号を訊かなかったことを今更ながら悔やんだ。ここから動けないのは困るな。かといつてどこかで時間を潰すわけにもいかない。あと15分待つてみよう。

香織は器用な女じゃない。今までどう過ごしてきたのだろう。まさか以前のあのどうしようもない男と付き合い続けるのは、あの両親が許さない筈だ。友達の結婚式で一緒になった時は、新郎側と新婦側に離れて座っていたので殆ど会話をしなかった。

去年の暮れぐらいだろうか、代理店時代の同僚が香織らしき女を六本木のクラブで見かけた、と教えてくれた。僕は何も考えずあっさりと否定した。彼女は金の為に媚びたりへりくだったり出来ない、最も水商売に向いてない女だからだ。

もしその話が本当で、何らかの事情でそうせざるを得なかったなら、なにか困ったことになっているのかもしれない。両親にも頼れず、僕にしか頼めないことなのかもしれない。まあいいさ。さっきの人も言っていた。どんな話であれ、最後まで優しく話を聞こう。

僕はそれから長崎さんのことを考えた。彼女はどうして僕のような男を好きになったのだろう。周りには若くて健康的で前途有望な男が沢山居るだろうし、彼女程の美貌なら誰も放って置かない筈だ。恋愛の経験も多少は有るだろう。わざわざ僕を選ぶ理由が無い。もしあるとすれば、僕たちは環境的に近すぎたのかもしれない。事務所は僕の住まいでもあって、できるだけ生活感のないよう心がけているのだけど、それに何時も同じ部屋で二人きりだ。まさかそんなことで恋に堕ちると思えないのだが、若い女の子はもともと理解できないところがある。そのうち新しく好きな人が出来て、今日のことなんてどうでも良くなってしまうだろう。

駄目だ、香織は来そうにない。元々時間にはルーズだった。帰る

前に、もしかして事務所の留守電に何かメッセージが入ってるかもしれない、そう思って自分の携帯からリモート操作で留守電を聴くことにした。

僕と長崎さんが事務所を出た直後から何本か仕事関係の問い合わせが入っていた。次のメッセージが6本目で最後だ。17:49分…

「あなた…ごめんなさい・・・もうなにもかもおしまいなの…。
さようなら」

間違いなく香織だった。

第六話 霧雨

4

僕は急いで銀座線の乗り口に向かった。途中何人もの人とぶつかった。しかしそんなことにかまってはいられなかった。だいいち僕は香織の両親の連絡先さえ携帯に控えていなかった。部屋に帰れば何とかなる、ここから電車でさえ乗ってしまえば15分で表参道に着く。しかしその先僕の行動力には限界があった。こんな時頼りになる奴は一人しかない。僕は電車を待つホームで電話した。

「すまん俺だ。ちよつと困ったことになってる、説明している時間も惜しい。すまないが今直ぐ青山の俺のところまで来てくれ。足が居る、それとまだ食事を済ませてないんだ。何か喰う物を頼むよ。ああ、そうだ、頼むよ」

奴はこんな時極めて冷静沈着だ。何も言わず電話を切った。

僕は電車の中で様々なことを思い巡らせた。勿論最悪のケースも想定した。彼女は僕と会う約束をしていた、そして来なかった。香織は何処に住んでいるのだろうか？等々力の実家なら直ぐに連絡がつくはずだ。

新橋、虎ノ門、溜池山王、赤坂見附：電車はなかなか進んでくれなかった。僕は激しく後悔した。たとえ離婚したとはいえ、連絡先ぐらいは知っておくべきだった、否、一年に一度は電話一本すれば、お茶を飲むぐらいなら出来た筈だ。僕にも責任がある。

電車を飛び降りて一心不乱にマンションに向かって歩く。紀伊国屋の駐車場に大きなシボレーの四輪駆動が停まっていた。佐久間は今もう着いているようだ。

マンションの鍵を開けて中に入りデスクの一番下の引き出しを開け、昔のアドレス帳を探した。ドアが開く音がして佐久間が入ってきた。

「突然ですまん。香織がどうも様子がおかしいんだ。銀座で七

時に会う約束をしていたんだが来なかった。おかしいと思って会社の留守電を聞いたら：「そうだ、聞いてみてくれ」

僕は留守電の前の5件を飛ばして香織のメッセージを佐久間に聞かせた。

「これは：ちょっとまずいな。どうする、これから」

「今香織の実家に電話してみる。・・・どうしてだ、使われていない。そんな馬鹿な。彼女の両親はしっかりした人達だ。立派な家に住んでる。引っ越すとは思えない」僕は動揺した。僕の知らないうちに何かが起こっている。

「じゃあ手がかりが無いんだな：取り敢えずその家に言ってみよう」

「わかった、今支度をするから車を出して青山学院側にハザードを出して停まっていてくれ。直ぐに行くよ」彼は了解、といって出て行った。

僕はトートバッグに香織に関連付けられるものを次々放り込んだ。一緒に暮らしていたときに撮った写真、連絡をつけられそうに思われる友人の連絡先、彼女が置き忘れていった高校の同窓会名簿、そんな何もかもだ。

時間は九時を回ろうとしていた。急いで車に向かう。生暖かく湿っぽい空気の匂いがし、もしかしたら降るかもしれないと思った。香織、無事で居るんだ。

車に乗り込むとジャケットと杖を後ろの座席に放り投げて、佐久間が買ってきてくれたクア・アイナのハンバーガーを貪るように平らげた。カップホルダーのアイスコーヒーを流し込むと少し落ち着いた気分になった。僕は佐久間に事の成り行きを説明し、ここ何年か音沙汰の無かった香織が一体どうして僕と会おうとしたのか理解できない、と話した。青山通りから国道246号線に合流する交差点は何時ものように渋滞している。等々力までは小一時間かかるかもしれない。

「その六本木の店にも行ってみよう。店の名前は分かるのか？」

「ああ。たしか、凜、だったと思う。ロアビルの裏手辺りらしい、そう聞いた」

池尻から三軒茶屋までなかなか動かない。佐久間は裏道を使って祐天寺から還7に抜け、駒沢から目黒通りに抜けようとした。威圧的な大きさのシボレーは混雑した道を滑らかに走った。

「ほかに当たれそうなところは無いのか？車に乗っている間に連絡をつけられそうなところに全て掛けるんだ」ああ、分かっている、そういつて香織のOL時代の同僚やダイビング仲間、僕の知っている限りの人達に電話を掛けたが、繋がったのは三人程で、どの人もここのところ全く音沙汰が無いとの事だった。しかし最後に繋がった僕らが別々に結婚式に招待された奥さんの方へ実は彼らも離婚していて電話が掛けづらかったくは、今年の年賀状がサイパンのリゾートホテルから届いていて、今とても幸せだと添えてあったと教えてくれた。

香織の実家は等々力陸橋の脇にある品のいい私立中学の校門脇にある。陸橋の手前を右折しそちらに向かうと、不意に僕の携帯が鳴った。長崎さんだった。一瞬出るのを躊躇ったが、変な誤解をされるのも後々困るので電話に出た。「あ、長崎さん。今日は本当に助かったよ。どうもありがとう」

「社長、今日奥さんとお会いしたんですか？もう事務所に戻ってるんですか？私：こんな電話したら嫌われると判ってます。でもどうしても：我慢できなくて」

「僕は事情があつて香織には会っていない。今とても複雑な事情を抱えていて、事務所へ一度戻ったが直ぐに出た。君に今その事情を上手く説明できない。ただこれだけは解って欲しいんだけど、僕は君がアルバイトを頑張ってくれていることに本当に感謝している。しかし：君が僕にに対して特別な感情を持ちながらあの事務所で一緒に働くのは無理だ。君はとても優秀だし広告の仕事を選びたいなら僕のところに居るべきじゃない。君のためなんだ。わかるかい？」

「・・・そんな優しい言葉でごまかさないで。私社長から離れる

なんて絶対厭です。私ずっと想ってきたんです。ずっと…簡単に諦めたりしません。社長に迷惑掛けるつもりありません」

「・・・分かった、とにかく今度ゆっくり話し合おう。今どうにもならないほど取り込んでいるんだ。僕はこの話を決して疎かにしない。約束するよ、本当だ。」そういつて切るうとした。彼女は小さな声でごめんなさい、といって切った。彼女らしくない弱弱しさだったので愛しく感じてしまった。僕は本当にこういうのが苦手だ。「問題はほかにも有るみたいだな」佐久間が苦笑いを含んでそういった。

香織の実家は跡形も無く消えていた。きれいに整地されフェンスで囲まれていた。軽く200坪はあるだろう。バブル後とはいえ相당한固定資産だ。

佐久間が隣の家にインターホンであれこれ訊いてくれていた。僕は車の中でNTTに問い合わせ、クラブ凜の番号を調べて電話を掛け、人捜しをしていて今から伺ってもかまわないか、と尋ねた。幸い快く応じてくれたのでこれから少ししたら伺いますと約束した。

霧のような雨が降り始めていた。僕は雨が苦手だ。雨は僕の心から様々な動機を奪っていく。せめて今だけは振って欲しくなかった。佐久間が戻ってきてドアを思い切り閉めた。静かな世田谷の住宅街にショットガンのような音が響いた。

「詳しくは知らないらしいが、近所のうわさでは行方不明らしいぜ」

第七話 夜を見つめて

六本木の街は雑多な人間でこった返していた。もう直ぐ電車がなくなる時間だというのに、ひと気が減るどころか増える一方だった。鳥居坂のカープールからロアビル方面に向かって佐久間の肩を借りて歩く。下衆な外人が同性愛者だと勘違いして僕達を冷やかした。

「久し振りにノックアウトしてやれよ、アキラ。すかつとするぜ」
「ふん、逆にやられちゃうよ。もう若くない」

僕と佐久間は大学時代、ボクシング部に入部して知り合った同級生だ。僕らは身長も体重もリーチもほぼ一緒だったが、大学から始めた僕と違い、インターハイで優勝経験のある佐久間は、追いかけるには遠すぎる存在だった。

クラブ凜はそろそろクローズなのだろう、アフターがあるホステスが急ぎ支度で出て行こうとバタついていたが、席をわざわざ用意して黒服が案内してくれた。

「お待たせしました。経営者の池内です。女性を捜しているとか……どんな女性ですか？」物腰の柔らかい、華奢な女性だった。僕は写真を見せて、

「僕の知り合いが去年の暮れにこの店で見かけたというんですが、僕の別れた家内なのです。」

「……これは里佳ちゃんね。間違いないわ。長瀬君、博美ちゃんがまだ居たら連れてきて頂戴」

佐久間と車に戻って外苑東通りからマンションに帰った。今日中に出来ることはなくなった。香織は確かにあの店で働いていた。そして売り掛けと前借りを残して消えていた。博美というホステスは、入店が同じ時期だったので何回か食事をしたが、プライベートなことは知らないといった。店に来なくなつたのは七月末で、直後に携帯は解約されていたという。仕事振りはやや地味だったが、何人か

固定客を抱えて遅刻・無断欠勤などは一切無かった。ゴールデンウィーク過ぎから様子が変になり、何かの問題を抱えてとても疲れている様子だったらしい。お金のこともあるので何とか見つけて欲しい、全面的に協力するとママはいった。

タンブラーに濃いめのバーボンソーダを二つ作ってひとつを佐久間に渡した。さすがに二人とも疲れきっていた。結局大した手掛かりも掴めず、それどころか解らない事が増えただけだった。

「後は警察に搜索願を出すぐらいだな、奴らもこの程度の手掛かりと状況じゃあ、まともに動かないだろう。アキラはどうしたいんだ？手を引いてもいいと俺は思う。ずっと縁遠かったわけだし、命に関わる確証も無い。事件性があるなら彼女の親族が動いている筈だ。アキラのところにもいずれ連絡があるだろう。下手に動いても仕方がない。心配だろうがな」

「ああ、もう遅いし朝一番で赤坂署に行ってくるよ。幸い今暇なんだ。やれることはやろうと思う。手伝わせて悪かったな」

「いいんだよそんなこと。それよりお前、また少し悪くなったな。それが心配だ。無理をするなよ。ストレスは進行を早めるだろう。命を削ってるのと同じだぜ」

ベッドサイドの窓から外を眺めながらタバコを吸った。青山通りの車の音がわずかに聞こえるだけで、とても静かだった。香織と一緒だった頃、こうして二人で外を眺めながら夜通し話をしたな。僕らは昔、とても仲がいい夫婦だった。週末の夜はずっとベッドの上で寝ずに過ごした。何度抱き合っても飽きることが無かった。まだ僕の目がちゃんと見えていた頃の話だ。街明かりに照らされた香織の横顔、シーツに包まれた優しい曲線、ボビーブラウンやジャネット・ジャクソンのアルバムや香織の好きだったカシスのシャーベット、よく着ていたシルクのブラウス、得意だったパスタ料理……。僕が目が悪くならなければ、僕らはあのまま仲良く暮らせただろうか。こ

んな風に行方を捜して何も解らず憂鬱になつたりしなかつたのだらうか？香織の人生を狂わせたのは僕なのか！？・何時しか霧雨はやみ、東の空がうつすらと明けてきた。僕はどうして、誰に、誰のために、生かされているんだろう。何が一体楽しいのだ？白い杖について右往左往する人生なんて何一つ楽しくない。楽しみや生きがいなんてくそくらえだ。

何故、俺なのだ？

第八話 Happy

5

久し振りにいい天気だった。僕はすっかりした朝食を作って今日のことに備えようと思った。朝一番で警察署に行かなければならなかったし、昼からは長崎さんも来る。色々考えると憂鬱だから何かに集中したかった。細かく刻んだベーコンを炒め、スライスした赤パプリカと玉葱を生のはうれん草と合わせ、ペーパーで脂ぎりしたベーコンをトッピングする。マヨネーズに牛乳を少しだけ足してのばし、クリームチーズを合わせてきつめに黒胡椒を挽いてドレッシングを作る。キウイとオレンジの皮を剥き大きめのダイスカットにして、無糖のヨーグルトを上からのせて、蜂蜜を軽くかけレモンを搾る。コーヒーを沸し厚切りのトーストを焼いた。発酵バターも用意した。

盲人の料理は工夫が必要だ。火加減は手のひらで確かめるしかないし、炒め物は火がどの程度通ったか分からないので苦手だ。自然と煮込み料理が多くなる。ベーコンは脂が多いので、火加減さえ間違えなければかりつとしたのが上手に出来る。

僕は新聞が読めないの、毎朝ネットでチェックする。ウィンドウズの設定を視覚障害者用にカスタマイズし、フォントも最大に設定してある。サラダを先に平らげ、トーストをかじった。政治家のスキヤンダルと関西地方で連続放火、父親が自分の子供を虐待：いつも通りといえいつも通りだ。若い女性の関連するニュースは無かった。油断してヨーグルトをパジャマに落としてしまった、こんな事はよくあるので気にしない。そのためにパジャマのままなんだ。食器を洗い、乾拭きして片付け、昨日の下着と靴下、そしてパジャマを洗濯機に放り込む。今の洗濯機は乾燥までしてくれるから便利だ。

掃除機を丁寧につけ、靴を軽く磨いた。赤坂署にはラフな格好で

行こう。ネイビーのポロにリーバイスのホワイト501、グッチのビットモカシンはスエードの物を選んだ。

赤坂署からタクシーで戻ると昼前だった。朝しつかり食べていたので空腹感はない。

警察は思った通り乗り気ではなかった。こんな案件はこの署だけでも腐るほどあるし、第一この留守電だけでは失踪の確証がないとのことだった。忙しいので出来れば勘弁してくれといわんばかりだった。僕はもし後々事件性のあることが分かったときに貴方は責任がとれるのか？と尋ねた。とにかく搜索願は出させてもらった。僕はルーペを使ってややこしい警察の書類に色々書き込んだ。担当者は嫌みっぽく「あんたも大変だねえ、そんな目なのに別れたかみさんの事で色々さあ」といい、下品に笑った。知性の欠片も無い男だった。こんな奴に一刻を争う大事なことを頼まなきゃいけないのはとても情けなかったが、多かれ少なかれ警察なんてこんなもんだと直ぐ諦めた。

「おはようございます」長崎さんがきつちり10分前に入ってきた。玄関はストッパーをかけて開け放してある。長崎さんは爽やかな秋の空気と一緒に自然に僕の横へやってきた。「社長、昨日はすいませんでした。私、自分のことしか考えてませんでした。仕事には持込んだりしません。だから今まで通りここに置いてください」僕はああ、気にしてないよ、と言ってパソコンに向かった。長崎さんはあの香りをつけていた。クリニークのハッピー。渋谷の彼女と長崎さんの間には、何億光年の隔たりがあるように思えるが、それはあくまでも僕の主観であって、彼女達にとっては自分自身を演出するツールに過ぎない。携帯が不意に鳴った。

「ああ、俺だ。佐久間だよ。色々わかったぜ。あの等々力の家は然るべき手段をふんでしつかり処理されてる。今はあの学校の所有らしい。あとな、両親は兵庫県に転居届がでている。会社の登記はお父さんが清算人になって解散処理されている。取引先の人には夫

婦で隠居すると言つてたそうだが詳しいことは分からない。今はその程度だ」僕はこちらの経緯と礼を言つて切つた。

「長崎さん、僕はこれから外出する。電話番号を頼むよ。夕方には帰ってくる」

僕は歩いて東郷神社の近くにあるカフェに行くことにした。長崎さんと二人で居るのは気が重かつたし、少し頭の中を整理したかつた。

土曜日なので人通りが多かつた。ラフォーレの脇から竹下通りを抜けるとそのカフェはある。僕は週に何回かここへ来て仕事の構成を練る。食事を済ませてしまうことも多い。この店のオーナーとは懇意で、居心地がすこぶるいい。ドライカレーのランチプレートとアイスカプチーノを何時も注文する。昭和時代のスナック・バーをイメージしてるからか、天井の隅にテレビを吊り、昼間は付けっ放しにしている。

香織の両親が健在なら今回のこととは関係ないのかも知れない。しかし隠居して田舎暮らしするような両親ではなかつた筈だ。香織をひいきにしていた客一人一人を当たるか。あの博美というホステスにもう一度会ってみるか。今この時間じゃ迷惑だろうが仕方ない。彼女の携帯に掛けると以外にも直ぐに出てくれた。とてもいい感じの受け方だつた。

「かかつてくるような気がして待つてたんですよ。私そういうの結構鋭いんです。里佳ちゃんのこととは全く解らなかつたんだけど。どうですか？何かわかりましたか？」僕がある程度のことを説明すると、これから会わないか、と言い出した。僕は君が迷惑でないなら会つて香織についていた客のことについて訊きたい、と云つた。

「平気ですよ、私あの店ではアルバイトだから昼夜逆転の生活ではないです。それより待ち合わせですね。何処まで行けばいいですか？自分に都合のいい場所に決めてください。それとも駅の改札とかがいいですか？移動が大変でしょう。お住まいに伺うのは失礼だ

ろうし……」細かい気配りが嬉しかったが、事務所には長崎さんが居るし、丁度原宿に居るんだから渋谷でも新宿にでも出れる。彼女に何処から来るのか尋ねると二子玉川だと言つので渋谷のセルリアンホテルで4時に待ち合わせることにした。僕は長崎さんにセルリアンで人と会うことになったから定時の6時にあがるようにと連絡した。鍵はスぺアで掛けてポストに、何時もの通りだ。

博美は約束の時間に颯爽と現れた。僕の目にも解る、濃い赤のミニのスーツに、黒いシルクのキャミソールを合わせていた。昨日の夜とはまた違って、シックでゴージャスだった。博美はさつと僕の腕を取ってコーヒールoungeに導いた。自然で慣れた動きだった。「私の友人の女の子で全盲の子がいます。だからこういうの、平気なの。っていうか、何でもしてあげたくなくなっちゃう。アキラさん、素敵だから」突然自分の名前を言われてびっくりした。「昨日のお友達がそう呼んでたでしょう？」

香織の客のうち最も店に通っていたのは三人で、その中でも博美が連絡をつけられるのは二人だった。直接番号は知らないものの、一緒に来る事の多い客やホステス仲間に頼んで間接的に折り返し連絡してもらつよう頼んでいた。手際が良くて無駄がなく、博美が賢い女なのだと解った。

「後はかかってくるのを待つだけだけど、土曜だからどうか。家庭サービスに忙しいかもね。どちらにしても少し待つ必要があるから、今日は夕飯と一緒にしましょう。ね、いいですね」僕は承諾した。今日中に何らかの手掛かりが欲しかった。

博美は僕の病気のことを色々訊いた。そして自分の友達とよく似ているといった。

「網膜の病気なのでしょう？きつと一緒にね。黒く色素が沈着していく病気。アキラさんはまだ一人で移動できるけど、その子はちょっと無理かな。でも……二人とも頑張つて生きている。そこが素敵。」

私も負けられない、って思っちゃう」そういつて僕の左手の甲にそつと触れた。

僕と博美は食事の為場所を移すことにした。そしてそこにその友達を合流させていいか、と博美は僕に尋ねた。僕は別に構わない、といったがちよつと嫌な予感がした。タクシーで麻布十番のモンズインカフェに移動した。友達はちよつとだけ遅れてくるみたいだった。生ビールの二杯目を注文した時友達が到着したらしく、博美が店先まで迎えに行った。連れてきた女性は簡単な挨拶をした。照明が暗くて姿かたちが判らなかったが、紛れも無く、僕の愛する、渋谷の「彼女」だった。

第九話 三日月

僕は激しく動揺した。そして、それを悟られない様平静を装う程に僕の心は苦しくなった。「彼女」は僕と気づいているのか？しかし「彼女」は何の躊躇も無く話しかけてきた。かかりつけの病院は何処か、網膜色素変性症協会に入会しているか、残存視野は何度かなどと気さくに質問した。僕はテーブルのフロートキャンドルで僅かに反射する彼女の胸元の小さなクロスのペンダントヘッドと、その直ぐ横まで伸びている真っ直ぐで少し茶色がかった髪を見つめて動けなくなってしまうた。博美がそれに気づいてそつと僕の膝を叩いた。

「ごめん、最近色々なことがあってついぼつとしてしまった。とにかく同じ病気ということでこれも何かの縁だ。これからも仲良くしてください」

「紗代が綺麗な子だから見とれちゃったんでしょう？！紗代は化粧が苦手だから何時もすっぴん！で、これだもん頭きちゃう。でも紗代、アキラさんはあたしが狙ってるんだから邪魔しないでね」

「寛子の邪魔何てするわけ無いでしょう！仕返しが怖いもの」二人は本当に仲が良かった。「彼女」は紗代、というのが本名だった。博美は寛子か。寛子は僕らの馴れ初めを軽く説明したが、香織の話は出さなかった。そして不自由な二人に困ったことが無いように細かく気を配り、楽しい話を盛り上げた。紗代もリラックスして楽しんでるようだった。彼女の全く違う一面…いや、これが本来の姿なのだろう。紗代は清潔感のある落ち着いた感じの女性だった。食事は楽しく進んだ。僕もやっとリラックスできるようになった。三人ともよく飲んだ。ビール、ワイン、ジントニク、チンザノソーダ…。何時しかすっかり夜になっていた。時計を見ると丁度9時だった。その時寛子に電話が入り、ごめん、といって席を立った。表で話しこんでいる様子だった。

「僕と気づいているんだろう？心臓が止まるかと思ったよ」そう僕が云うと紗代はしばらく黙っていた。そして、「こうしてプライベートで知り合ってしまった以上、もうお店には来ないでね。貴方が知ってる渋谷の私は忘れてね。貴方ならわかってくれるでしょう？」僕は密かに愛する人を前に納得せざるを得なかったが、果てしなく大きな喪失感に襲われた。薄暗い照明とココナッツミルクや魚醤の匂い。酔いが一気に回って目の前の景色が歪み始めた。寛子はなかなか戻ってこなかった。

僕らはずっと黙っていたが、紗代が今日はこれで帰るね、またどこかで食事しようといったって携帯の番号を教えてくれた。僕はスタッフに声を掛けてタクシーを呼んでもらい、ついでにクレジットカードで支払いを済ませた。寛子が戻ってきて紗代が帰るというのを知り、じゃあみんなで店をでようということになった。丁度タクシーも着いたようだった。

紗代をタクシーに乗せると寛子は運転手に細々と説明した。無事に帰れるように計らっているのだろう。

タクシーのテールランプを見送って車が建物の影に消えると、寛子が僕の腕を掴んで「少し歩こうよ」といった。

「連絡あったんだけど大した事解らなかったなあ。学習教材の製作会社を経営してるおじさんんだけど、結局里佳ちゃんのこと落とせなかったみたい。もう一人はまだ連絡ないの。力になれなくてごめんなさい」

「いいんだよ。君のせいじゃない。それに何だかどうでもよくなってきたよ。香織が本当に僕に会うつもりだったのか。余りにも突然で不自然だ。何か、特別な事情、というか、失踪する証拠を残しておきたかったのかもしれない。とにかく時間がかかりそうだ。これは僕のカンなんだけど、香織はどこかでちゃんと生きてる。まだ時間はあると思うんだ。」

「今でも愛情が残ってるの？」

「いや、もう長い時間が経って瑕も癒えたし、それぞれが自分の幸せを掴めばいいと思ってた。ただ…離婚後香織は決して幸せじゃなかったみたいだ。僕が病気になるなければ僕らは仲のいい夫婦で居られたかもしれない。そう思うと責任を感じてしまう」

「アキラさん真面目過ぎるよ。もう香織の事なんていいじゃない」寛子はそういつて僕の正面に立ち、首に両腕を絡ませてキスした。僕は一瞬怯んだが、どうにでもなれ、そんな気持ちで寛子を受け入れた。仙台坂を登りきったところだった。僕の目にも見えるほどの三日月が紫の空に架かっていた。どうにでもなればいい・・・。

第十話 寛子

寛子を連れて青山のマンションに帰った。昨日出会ったばかりの女を連れ込むなんてどうかしてる。そう思いながらも僕は単純な話、寛子と寝たかったのだ。

この夜を乗り切るにはもう少しアルコールが要る。僕はグレープフルーツとオレンジを搾ってジンで割り、二種類のロックグラスに氷を4つづつ落として注いだ。

「・・・おいしい。もつと飲みたくなっちゃう」

「おかわりは幾らでもある。遠慮しないで飲んでくれ。紀伊国屋は高いけどいい果物を何時も用意してる。それに野菜も。僕みたいに鮮度をこの目で確かめられない人間にとってはありがたいことだ。だからここからなかなか引つ越せない」

「いいじゃない、ずっとここで。アキラさんに似合ってる」

「そうかな。でもありがとう。僕もこの街が好きなんだよ。そうだ、僕は昼過ぎにここを出てからずっと外に居たから、いい加減汗まみれだ。悪いけどシャワーを浴びさせてくれ。つまみは冷蔵庫の中にブルーチーズやナッツがあるから好きにしてくれ」

熱いシャワーを浴びると様々なことが甦ったが、鬱陶しいことを考えるのはやめにした。どうにもならないしどうなっても構わなかった。紗代のことを考えると気がおかしくなりそうだったからだ。

ボディシャンプーで汗を洗い流している時、扉を開けて寛子が入ってきた。僕は心臓が止まるくらいびっくりした。

「おいおい、まだ終わってないぜ、もうちょっと待ってくれ」

「いいじゃない、一緒に入りたいの。背中流してあげる」寛子は僕から海綿を取り上げて首から背中を優しく洗い始めた。手のひらを取り、手首から肘、二の腕から腋を丁寧に洗い上げた。狭い浴槽の中で何時しか互いに向き合い、寛子の気持ちが嬉しかった僕も寛

子の身体を優しく洗った。寛子の肌は滑らかで艶やかだった。鎖骨から胸へと海綿を移すと、柔らかく形のいい胸が若さと情熱を表すように熱を帯びていた。小さく吐息を漏らす寛子が愛しくなり、優しく唇を合わせて舌を絡ませた。僕のペニスは熱く、硬くなり、寛子はそれを手のひらで優しく包み、それを上下させた。キスは激しさを増して互いに貪るように唇を合わせた。

「ねえ、ベッドに行こうよ。このままだとふやけちゃう」僕は頷いた。シャワーで全身の泡を流し、バスローブをまとった。寛子も一緒にあがって僕のバスローブを取り上げ、身体を拭きあげた。僕は残っていたジンで渴いた喉を潤し、一緒にベッドに入った。

寛子に魅了されるのに大した時間はかからなかった。寛子は僕を氣遣って細かい心配りをし、どうしたら僕が嬉しいか、という事を面倒がらず、焦らずに一つ一つ尋ねた。

「キスは好き？私の唇が何処にあるか解る？」「次は瞼と耳にキスして欲しい」「髪を優しく弄られるのが好き」僕は時間を忘れて寛子の身体の隅々までキスした。寛子も僕の身体を唇で確かめるようにキスし、最後に僕のペニスをそつと握って、好きにさせて欲しい、と言った。僕はいいよ、後で僕も好きにさせてもらう、というと寛子はくすつと笑った。

寛子は長い爪で僕のペニスの一番敏感な部分をなぞり、睾丸を指の腹で弄んだ。細かく吸い付くようなキスをし、優しく口に含んで舌を這わせて震わせた。僕は右手で寛子のこめかみから髪を掻き揚げ、スタンドの明かりで仄かに映る寛子の横顔を眺め、歪んだ視界の先に在るであろう、官能的な表情と視線を想像して興奮した。

「そろそろ俺にも好きにさせてくれ」僕は寛子の右手にペニスを握らせ、もう一度唇から耳、首筋から鎖骨、そして胸へと舌を這わせた。乳首は驚くほど硬く強張り、軽く歯をたてると寛子は小さく呻いた。わき腹から背中へ、そして内腿へ移ると寛子の淫らな匂いが僕の欲望を一層掻き立て、「痛かったら言って欲しい」といつて

そつと指をヴァギナにあてた。

僕らは向かい合つて座り、互いの性器を弄んだ。寛子が目を見て欲しい、と甘えるようにいうので、僕はその息遣いが解るほどの近さで寛子の目を見つめた。そして人差し指をゆっくり挿し入れた。

「…凄く…素敵。愛してる」「…ああ、愛してるよ」寛子は次第に我を忘れ、何度が昇りつめた後、中に入ってきて欲しい、と懇願した。僕は頬に優しくキスし、淫らに熱を帯びて潤った寛子の中へ入った。

僕らは朝が来るまで何度も交わった。その合間に、まるで足りないものを急いで掻き集めるように自分のこれまでの事を話した。そして互いの共通点を見出そうと努力した。どのカップルでもそうであるように。たとえ僕が盲人であっても変わらない。

窓辺から昨日と同じ暁を眺め、昨日もこうして眺めていたんだよ、最悪の気分で、と話した。今はどうですか？と僕の胸に頭をのせた寛子が茶化すように訊くので、僕は「最高だよ」といった。新しい朝が始まるうとしていたが、僕達は抱き合つて深い眠りに堕ちた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5890c/>

ブラック・ラブ

2010年12月5日10時55分発行